

萩原朔太郎と韓国



梁 東国 (祥明大學校、
日韓比較文学)

1 はじめに

萩原朔太郎は口語自由詩の確立という大きな反響を呼び起こしながら大正詩壇に登壇した。以後、現代詩の形成にも少なくない刺激を与えるのだが、朔太郎は新しい詩文学を模索しつつあった韓国の近代詩壇にも大きな影響を及ぼしていた。本稿は日本近代詩と韓国との相互関連性といった大きなテーマのもとで、朔太郎が関東大震災の中で朝鮮人虐殺事件を描いた詩をあげ、彼の文学の中で今までさほど扱われなかった社会思想性について論じてみる。一方、比較文学的な視角から韓国近代詩における朔太郎からの影響を突き詰めてみる。そのために近代詩の交流においてその仲介と媒介体の役割をしていた韓国人留学生と彼らが出版していた近代文芸誌を中心に、朔太郎がいつ、どのように韓国へ紹介されたかを探ってみたい。

2 朝鮮人虐殺事件と朔太郎

1923年1月『青猫』を上梓して好評を得た朔太郎は、日本近代詩壇の中堅詩人として確固たる位置を占めていた。ところで、1923年の朔太郎の作品のなかには少し変わった一篇の詩がある。

朝鮮人あまた殺され/その血百里の間に連なれり/われ怒りて視る、なんの惨虐ぞ!

1923年関東大震災の際、多くの朝鮮人が無惨に殺害されたという事実を描いた「近日所感」である。観念を排除して芸術派を目指していた詩人であるだけに、現実的な素材を濾過なく直接的に吐露したこの短い詩は朔太郎にとって異常な詩であるといってい過ぎではない。磯田光一によれば、この詩は、朝鮮人を標的とする攻撃が終息しつつあった9月5日、前橋市の西南部にある福岡警察署で起きた悲惨な事件がモチーフであると推察されている。「福岡事件」といわれるこの惨劇は、保護を要請して警察署に留まっていた朝鮮人を署長の留守に自警団200人が襲い、

1 『萩原朔太郎全集』(全十五卷)第三卷、筑摩書房、1975-1979、137頁、以下、詩・散文などはこれによる。『朔太郎全集』と略する。

17人が殺された悲劇的な事件である。前橋で起きたこともあり、朔太郎の憤怒に満ちた心情は「近日所感」の直接的な表現から読み取れる。

当時、日本文人による関東大震災の文学的な形象化は少なくないが、朝鮮人虐殺事件について冷徹に紙面に書いた人は殆んどいなかった。よく知られている文人としては竹久夢二があげられる。

『万ちゃん、君の顔はどうも日本人じゃないよ』豆腐屋の万ちゃんをつかまえて、一人の子供がそう言う。郊外の子供達は自警団遊びをはじめたのだ。『万ちゃんを敵にしようよ』『いやだあ僕、だって竹槍で突くんだろう』万ちゃんは尻込みをする。『そんなこと、しやしないよ。僕たちのはただ真似なんだよ。』そういっても万ちゃんは承知しないので餓鬼大将が出てきて『万公！敵にならないと打殺すぞ』（-中略-）"子供達よ。棒切を持って自警団ごっこをするのは、もう止めましょう。"²

夢二は関東大震災によって近代文明が破壊され、人間味を失っていくもどかしさを「災難画信」という版画に事実に内容を付け加え「都新聞」に連載した。引用文は「自警団遊び」という題名で6人の子供を描き、童話風の筆致で朝鮮人虐殺の問題をあげて当時の状況を風刺している部分である。集団的な心理による野蛮性を子供の遊びに転移させて鋭く批判するところから読み取れる社会思想性は、夢二が単なる画家と恋愛詩人ではなく、その領域を遥かに越えていることを暗示する。

朔太郎においても、朝鮮人虐殺事件は単に一過性の関心に留まる事件ではなかった。「近日所感」を発売した直後に朔太郎は「ある野戦病院に於ての出来事」というアフォリズムを書いている。

戦場に於ける「名誉の犠牲者」等は、彼の瀕死の寝臺を取りかこむ、あの充電した特殊の気分（-中略-）彼の魂は高翔し、あたかも舞臺に於ける英雄の如く、悲壯劇の高調に於て絶叫する。「最後に言ふ。皇帝陛下萬歳！」と。³

朔太郎は戦場で負傷を負った兵士たちが周りからの激励によって鼓舞され、その雰囲気流されるかのように皇帝陛下萬歳と叫んでいることをことさらに描きながらこれを野戦病院の悲劇であると嘆く。個人の意思が無視される集団心理に強く反発していることが読み取れるが、これも詩人の内面に潜んでいる現実社会認識を直

2 秋山清『郷愁論—竹久夢二の世界—』青林堂、1971、33頁

3 『朔太郎全集』第四巻、294頁、『新興』（1924年12月号）のち、『虚妄の正義』に収録の際「ある野戦病院における美談」に改名される。

接的に吐露したものである。この集団心理への憤怒は結局一般大衆への不信につながり、朔太郎は人間そのものへの深い懷疑を抱くに至る。1923年9月以後、「ある野戦病院に於ての出来事」をはじめ、人間の野蛮性や野獣性を類人猿に喩えた「猿」、戦争を民衆の意思とは関係のない、政府と官僚、軍閥と財閥による「打算的な決行」と定義しつつ、自身の戦争観を内包させた「戦争に於ける政府と民衆」などがよい例であろう。関東大震災の朝鮮人虐殺から触発された現実認識が、朔太郎にいかにも多くの社会性を与えたかがこのようなアフォリズムからよくわかる。朔太郎が詩文学に描いた韓国人はただ1回に過ぎないが、朝鮮人虐殺という悲劇的な事件により、彼は思想性と強い知性を噴出させたのである。

3 韓国の初期文芸誌の中の萩原朔太郎

韓国近代詩壇では萩原朔太郎をどのように受容したのだろうか。このことを明らかにするためには、まず日本への留学生と彼らが編集した近代文芸誌に焦点を合わせなければならない。とりわけ、韓国近代詩壇の新しい時代を切り開いた孤高の先駆者といえる朱耀翰(ジュ・ヨハン)に注目する必要がある。朱耀翰は1912年来日して、明治学院中等部及び第一高等学校に学んだ。この間に『文藝雑誌』『秀才文壇』『文章世界』などに詩、俳句、随筆などを投稿する傍ら、川路柳虹が設立した曙光詩社の同人詩集『伴奏』(季刊・全五巻)や、続いて刊行された詩専門誌『現代詩歌』(月刊)の同人になって次々と詩を発表する。1919年、3・1独立運動が起こり、その二カ月後、朱耀翰は上海に亡命するが、それまでに創作詩三十七篇、俳句三篇、エッセイ一篇、多くの短評などを発表している。また大正期の日本詩壇の大黒柱の一人として高名であった川路柳虹によって三回も新人詩人として紹介されると共に、未来派の提唱者・平戸廉吉らと親密な交友関係を維持するなど、日本の詩人たちと深く関わっている。このような日本での経歴がその後、彼の韓国語詩文学に投影されたことは容易に推察できる。

朱耀翰は韓国文壇における最初の同人雑誌といえる『創造』の創刊号と第二号に「日本近代詩抄」を連載する。「日本近代詩抄」は明治期と大正期の日本近代詩壇の流れと代表的な詩人の詩を翻訳し紹介している。新体詩から島崎藤村、そして北原白秋と三木露風など、綿密に日本近代詩壇を眺望した「日本近代詩抄」は日本近代詩を海外に紹介した最初の詩文学史とって言い過ぎではない。

明治四十一年、北原白秋は有名な詩集『邪宗門』を著した。(一中略一)その官

能的な要素には明らかに象徴派による影響がある。また、同氏の小曲集『思ひ出』が藤村の『若菜集』以来の好評を博したのも注目すべき出来事である。白秋と同時代の作家に三木露風がいる。彼は初めは情緒的な詩風による優れた作品で詩壇に登場してくるが、後には幽玄な趣をもった象徴主義の世界を切り開くようになる。最近では、彼の『幻の田園』が一時評論家たちの攻撃的になったが、しかし公正な立場から見れば彼が辿ってきた道は決して無意味なことではなかったといえる。⁴

上の引用文は、「日本近代詩抄(2)」の最後の部分として〈白露時代〉を中心に浪漫的象徴主義について解説している。真の象徴主義が存在したかについての議論は今でも続いているが、耀翰はこれを浪漫的象徴主義と定義していることから、彼がいかに日本近代詩の流れに詳しく見えて取れる。ところで、「日本近代詩抄」には口語体自由詩を確立して新しい時代を切り開いた朔太郎については直接には言及されていない。しかし三木露風を紹介したくんだりでは「『幻の田園』は一時評論家たちの攻撃的になった」と記しており、そこから朔太郎が発表した「三木露風一派を追放せよ」などの一連の文章を思い浮かべないわけにはいかない。この事は、耀翰がいかに日本詩壇の動向に注目していたかを物語っており、殊に朔太郎の詩文業について熱い視線で注視していたことを暗示する。実際のところ、耀翰の幾つかの作品は朔太郎と深い関連があるが、その影響の実相については後述する事にしよう。

韓国における朔太郎受容という観点のうえで、忘れてはいけないもう一人の詩人をあげれば、朔太郎を韓国の文芸雑誌に最初に紹介した黄錫禹（ファン・ソグ）である。黄錫禹は早稲田大に留学していた時、三木露風と交友するなど、自ら日本詩壇に飛び込み、日本語で詩を発表したこともあった。黄錫禹は留学中に接した日本詩壇の事情を、「日本詩壇の二大傾向(1)」という題名で『廃墟』の創刊号(1920年3月)に発表した。ここで二大傾向とは象徴派と民衆派を指すのだが、黄錫禹の個人事情によって実際のところ「日本詩壇の二大傾向(1)」即ち、象徴派の紹介に留まったのである。「日本詩壇の二大傾向(1)」では岩野泡鳴、蒲原有明、三木露風、北原白秋、萩原朔太郎等を紹介し、彼らの詩の翻訳を掲載している。そのなかで、朔太郎を紹介している部分を取り上げてみよう。

4 「日本近代詩抄(2)」『創造』第二号(1919年3月)43頁

萩原朔太郎は三木露風の攻撃者として、一時日本詩壇にその名を上げた人で、『月に吠える』という詩集と『詩の原理』、三木露風攻撃論文などがある。朔太郎は一時、三木露風派の芸術を猛烈に攻撃した。当時、野口米次郎、室生犀星などがどうして朔太郎を日本の大天才と認めたか、分らない。その当時、彼の詩想と感覚が比較的に新しく鋭敏であったからで、その詩境とか技巧は露風氏に比べて数百層も落ちていたのである。⁵

この引用文からは、朔太郎に対してやや低い評価がなされているように感じるが、その一方で彼が如何に日本近代詩壇の流れをくまなく注視していたかがうかがえる。また、当時露風に傾倒していた黄錫禹の志向が明確に打ち出されている。しかし、一方、朔太郎の詩に早く魅了され、なお自分の詩作に朔太郎の影を移したのが、ほかならぬ黄錫禹自身である。しかも、その詩作品には朔太郎の詩風の根幹ともいえる「青猫」という詩語がいみじくも投影され、神秘的かつ感覚的な詩風を生み出しているのである。ともあれ、朱耀翰の「日本近代詩抄」と黄錫禹の「日本詩壇の二大傾向」が持つ意味は、日本近代詩壇を紹介する事によって、詩文学への憧憬を抱いた若者及び初期の韓国詩壇に多くの活力を与えたということである。

4 朱耀翰と朔太郎

朱耀翰が日本詩壇で活躍していた1916年から1919年までに、最も頭角を現した詩人はいうまでもなく萩原朔太郎である。朔太郎に耀翰がいつから関心を寄せていたか、それを断言することは容易なことではない。さしあたって『現代詩歌』三号(1919年4月)以後、耀翰が毎号参加していた詩壇での合評といえる「(前)月の詩壇」を探ると、朔太郎について言及した短評に出会う。

いつもながら落ち着いた悲哀のリズムが感じられる。しかし「紫色の感情」には何かピツタリと来ないものがある。が、それは要するに語句上の問題で、氏の有する「憂鬱の熱情」は思ふまゝに静寂を好む僕の感情を捉へて往く。氏もまたいゝ意味に於けるセンチメンタリストである。僕はその優秀な涙を好む。⁶

この短評は「四月の詩壇」(『現代詩歌』四号)のうち、「萩原朔太郎氏の「黒い風琴」その他(感情)(短歌雑誌)」と題された合評で耀翰が語ったものである。短評

5 「日本詩壇の二大傾向(1)」『廢墟』創刊号(1920年7月)78-79頁

6 「四月の詩壇」『現代詩歌』大正七年五月号(1918年5月)32頁

の対象は、1918年4月号の『感情』に発表された「憂鬱の川邊」、「黒い風琴」と同月の『短歌雑誌』に載せられた「紫色の感情にて」である。これらの詩はいずれも陰惨で無為な生活の苦しみに、その創作動機をもとめることができる。朔太郎の創作年譜と関連づけて考えると、これらの詩は、大きな境界線に置かれている作品であることに気がつく。すなわち、この三つの詩を発表してから、三年余にわたり朔太郎は殆ど詩を発表しなくなる。言い換えればこの三編は詩的沈黙に入る前の、私生活に悶え苦しんだ感情を詩作に集約した力作なのである。とりわけ「黒い風琴」は朔太郎の詩世界における優れた音楽性の一面を直に感じさせる秀作の一つである。その一行目の「おるがんをお弾きなさい 女のひとよ」は母音[o]と鼻音[n]の反復による不思議な音色の調和をもたらし、まるでオルガンの響きをかもし出すかのような感じをあたえる。『現代詩歌』の同人たちも当然ながらこの「黒い風琴」に注目して短評を述べているが、耀翰は全く注目されていない「紫色の感情にて」について感想を述べている。それは 耀翰が「紫色の感情」「憂鬱の熱情」などの詩句を引用していることから確認できる。同時にこの短評は、耀翰が朔太郎の作品世界に深い関心を寄せていたことを密かに物語っている。つまり耀翰が語った「落ち着いた悲哀のリズム」「いゝ意味に於けるセンチメンタリスト」とは、ある感情や感受性によってもたらされた（いわば初期段階的な）情緒過剰の状態から抜け出て、詩的言語への昇華が進んでいることを意味する。朔太郎が『月に吠える』の序で、詩の本質について「私の詩の讀者にのぞむ所は、詩の表面に表はれた概念や「ことがら」ではなくして、内部の核心である感情そのものに感觸してもらひたいことである。私の心の「かなしみ」「よろこび」「さびしみ」「おそれ」その他言葉や文章では言ひ現はしがたい複雑した特種の感情を、私は自分の詩のリズムによつて表現する。併しリズムは説明ではない。リズムは以心傳心である。」と語ったところに似通っているのである。さらに「優秀な涙を好む」という表現は何とも朔太郎的な表現ではないか。このようなことから「静寂を好む僕の感情を捉へて往く」とは単に「紫色の感情にて」にだけの評価ではなく、朔太郎の詩世界への深い敬意と同感、そして強い関心を寄せていたことを裏付ける表現といえる。

7 「黒い風琴」『朔太郎全集』第一巻、159頁

8 『朔太郎全集』第一巻、10-11頁

5 結びに代えて

関東大震災の際、朝鮮人虐殺事件をいた「近日所感」という短い詩は無知の大衆への憤怒を露に表したものであるが、それは朔太郎にとって集団的心理と国家権力への強い疑問と反発という知性と思想性の強化をもたらすきっかけとなった。これは朔太郎への研究が詩文学を越え、アフォーリズム等を通してさらに総合的な視野で行われなければならないことを物語る。一方、比較文学研究の立場からは、韓国における朔太郎受容という観点で検討を行ってみたが、朔太郎は早くから留学生を中心に注視される存在であったことが伺える。紙面の余裕がないので、その具体的な影響まではここでは触れない。しかし、朔太郎は「春夜」の中で「ように」体を繰り返すことにより、曖昧で言い表しがたい情緒の表現を試みているが、耀翰はそれをイメージの明澄さに変えて後に韓国現代詩にも影響を与えたことは特筆すべきことであろう。また、朔太郎が「寝台を求む」「強い腕に抱かる」などで、身体用語を重ね合せて特有の官能表現を醸し出しているのを、耀翰は健康なイメージへと転換させ、さらには未来志向という、彼ならではの詩想へと変容させてもいる。韓国近代詩の成立期において、朔太郎からの影響は至大であったが、耀翰の例から端的にうかがえるように、そこから抜け出て変容を遂げていったことも、1920年代の韓国近代詩の一つの特徴として記されなければならないだろう。